

心得 47 感情は伝える、しかし感情的にはならない

感情的にならずに感情を伝えることが、子どもの行動変容をうながすポイントです。担任が感情的になることで、学級があらぬ方向に進んでしまうことがあるからです。

「今の行動はすごく悲しかった」「今の言動は人として腹が立つ」等、目を見て、静かに、ハッキリと伝えます。すると、担任の言葉は子どもの心にずしんと響きます。

一方、「ふざけるな！次にそんなことをしたら許さないぞー」と烈火のごとく子どもを叱ったとします。担任の言葉は、子どもの耳には入っても心には届きません。さらに、声を荒げる担任の姿を見ていた周りの子どもからは「怖い」「あんな言い方をしなくてもいいのに」等、不安と不満の声があたり始めます。

高ぶった感情は目を曇らせます。怒り、不安、焦り、緊張、恐怖、嫉妬、劣等感、優越感、親近感、期待、感動、愛しさ等、ありとあらゆる感情の高ぶりが担任の目を曇らせ、誤った児童生徒理解をうみ、最終的に不適切なアプローチとなって表れます。

感情を伝えることと感情的になることは、明確に分けて考えましょう。

心得 48 一貫性をもち

一貫性のある指導をおこないまししょう。担任の指導に一貫性がないと子どもたちは混乱し、不満をもつようになります。当然、騒然とした雰囲気や学級を包むようになります。

まずは、同じ事柄に対して昨日と今日で異なる指導をおこなわないことです。子どもたちは担任の些細な発言もしっかり記憶しています。一貫性のない指導をせざるをえない特別な事情があった時でさえ、子どもたちは心の奥底では納得していないものです。

また、**子どもによって態度を変えてはいけません。**同じ事柄に対して、AさんとBさんで対応が異なれば子どもたちは大きな不満を抱きます。

最後に、**子どもと同僚の間で態度を変えることも控えるべきです。**例えば、ポケットに手を入れて歩いている子どもを注意した担任が、ポケットに手を入れて歩いている同僚を注意しないのは筋が通りません。

一貫性のある指導をおこなうことで子どもからの信頼は増し、担任の言葉に重みが出ます。並大抵の覚悟ではこれを成し遂げることはできませんが、是非挑戦してみてください。